

日本語母語話者とスリランカ人シンハラ語母語話者の 「感謝の表し方」についての PAC 分析

S.M.D.T. ランプクピティヤ¹、内藤哲雄²

要旨

感謝を表現することが人間関係の親密化に重要な役割を果たしている。ところがスリランカ人シンハラ語母語話者の感謝では、言語での表出があまり見られないことが指摘されている。しかしながら他方で、スリランカ人シンハラ語母語話者も、無意図的に表出されることの多い非言語では感謝表現を用いているのではないかと推論される。このような背景から、本研究では、日本語母語話者とスリランカ人シンハラ語母語話者の感謝を表す言語・非言語表現を比較対照し、日本語母語話者とスリランカ人シンハラ語母語話者の暗黙裏の文化スキーマの相違を検討することを目的とした。

本研究では、暗黙裏に遂行されている「感謝表現行動」を探索するための方法として、日本の大学で学ぶスリランカ人留学生を調査対象者とし、潜在構造の探索に適した事例研究法 PAC 分析を用いた。結果では、シンハラ語母語話者がやさしく細目で相手を見る、挙手するなど、他方、日本語母語話者は相手の地位や性別、状況に関係なく感謝の言語表現を用いるが、同時に頭を下げる、会釈顔を見せるなどの非言語表現を用いて感謝を示すことが明らかになった。また、日本語とシンハラ語文化における類似点として、場、相手の立場・地位に応じて感謝の表し方を変化させることも示された。ただし、日本語母語話者が相手の立場や地位によって感謝の言語表現やそれらの丁寧さを変更しているのに対して、シンハラ語母語話者は対等以下の関係では言語表現を控え、代わりに非言語表現を使用していることが明らかとなった。

キーワード：感謝、非言語行動、日本語母語話者、シンハラ語母語話者、PAC 分析

¹ 久留米大学、外国語教育研究所

² 明治学院大学、国際平和研究所

1. はじめに

人間関係を進展させるには、相手の好意に対して日常的に感謝を表現することが重要である。特に、対人コミュニケーションを通して日本語母語話者との人間関係を進展させるには、感謝の表出が非常に重要であり、三宅（1993）は、「外国人が日本に降り立ったとき真っ先に覚えなければならない基本的語句のひとつ」（p.19）として感謝表現の重要性を指摘している。この指摘から、日本語母語話者が「ありがとうございます」のような口頭表現のみで感謝を表しているように感じやすいが、日本語母語話者がお礼に際してよくお辞儀をすることが知られている。つまり、感謝表現には、言語のみではなく、非言語が用いられていることを示すものである。しかし一方で、日本語母語話者と他言語母語話者のコミュニケーションに、誤解や失敗を生じる原因の一つに、感謝表現があるとされている（中村 2006、奏 2002）。例えば、スリランカ人シンハラ語母語話者⁽¹⁾ が相手との関係が親しいと認識した場合、相手に距離を感じさせないように口頭での感謝を控えることが指摘されている（ランプクピティヤ 2014c）。そこで、口頭で感謝を表出しないシンハラ語母語話者と頻繁に言葉で感謝を示す日本語母語話者の間では、コミュニケーションに摩擦が起きてしまう可能性が高いと考えられる。

では、シンハラ語母語話者は言語でも非言語でも感謝を全く表さないのだろうか。シンハラ語母語話者である筆者の認識から考えると、目上や年上の人に対する最大の感謝は、合掌し、相手の足元の床上に頭をつけることで表現される。これもお辞儀をする日本語母語話者と同じく、非言語行動による感謝と考えられる。ところが、非言語行動は無意識に遂行されることが多く、話者が持っている感謝表現の文化規範も暗黙裡になされることが多い。同じ社会に所属し、同一の行動基準をもつ文化規範なら、気づかれることがなくても、相手の行動基準と適合する可能性が高い。ところが異文化間では、行動の種類や基準が異なることが多い。そこで異文化相互の行動基準の違いを明らかにできないと、異文化間コミュニケーションは成功せず、摩擦、葛藤、対立に終わってしまうであろう。結果的に人間関係も深まりにくく、現社会で強く求められている異文化理解や多文化共生の実現に障害が残ることになるであろう。

そこで本研究では、上記の問題意識に基づいて、日本での日本語母語話者とシンハラ語母語話者の感謝における言語及び非言語行動とその背後に存在する文化スキーマを明らかにすることを目的とした。また、これらの結果を基に、異文化理解や多文化共生社会の実現に必要な提言を試みたい。

2. 先行研究の概要、疑問点及び本研究の目的

先行研究では、感謝を示す言語表現に焦点を当てたものが多く見られる（三宅 1994〈日・英比較〉, 秦 2002〈日・韓比較〉, スイリラット 2011〈日・タイ比較〉, 周 2017〈日・中比較〉, ランプクピティヤ 2013, 2014a, 2014b, 2014c, 2017〈日・シンハラ比較〉など）。これらの研究では、日本語とそれぞれの言語との比較対照を行い、感謝を表出する際に使用される言語表現の種類、その頻度及び表現が使用される場面などを明らかにしている。しかし、感謝の非言語行動に焦点を当てた研究と、その非言語行動の背景にある文化スキーマを明らかにした研究は存在しない。その理由として、上述した通り、非言語行動は話者が無意識に行い、暗黙裡に持っていることが考えられる。したがって、背景に存在する文化的なスキーマも話者と研究者が気づきにくいものであり、研究対象にはなっていないと言える。これらを踏まえ、本研究では、感謝の言語と非言語の双方を総合した行動及びその背景にある文化スキーマを検討する。

3. 研究方法

3.1 被験者

本調査では、日本の大学に通っているスリランカ人シンハラ語母語話者の、男子留学生 1 名（24 才）を被験者とした。スリランカで高校を卒業後 3 年間ほど自営業に従事。2017 年 4 月に来日し、日本語学校で 2 年間日本語を学習し、2019 年 4 月から A 私立大学に通っている学部生である。現在、日本ではコンビニでアルバイトをしており、日本人の感謝行動を観察した経験は豊富である

3.2 調査方法

既述のように、非言語表現は話者が無意識に行うことが多く、その背景に存在する文化スキーマも暗黙裡に利用されている。このため、通例のアンケートやインタビューのような研究手法では、非言語行動の内容や文化スキーマを探索するのは困難である。そこで本研究では、無意識的・無意図的な非言語表現及び文化スキーマを発見するのに適合する個人別態度構造分析: Analysis of Personal Attitude Construct（通称、PAC 分析）を用いた。

PAC 分析は、順に、①テーマに関する連想刺激文を作成する、②当該テーマに関連した連想反応を引き出す、③被験者に連想反応項目間の類似度を評定させる、④類似度距離行列を用いてウォード法によるクラスター分析を実施する、⑤被験者からクラスターについてのイメージを聴取する、⑥研究者が総合的に解釈するという技法である。

このように、統計分析まで含めて、①～⑥までの手順に従って行うことから、PAC分析は、単一事例であっても操作的で客観性の高い技法である。また、本調査方法では、被験者自身が連想した項目を用いて作成した類似度距離行列を被験者自身が解析し、それをもとにクラスターのイメージ構造を被験者の報告に基づいて、被験者と研究者が対話しながら解明している。これは、現象学的データ解釈技法であり、被験者の内面の潜在行動を探索するのに有効である。

<連想刺激文と手続き>

本研究では、感謝に関する2つの刺激文を作成した。一つ目は、日本人に見られる感謝の言語表現と非言語表現及びその際の社会的背景（文化スキーマ）を把握するための刺激文である（刺激文①の参照）。二つ目は、スリランカ人に見られる感謝の言語表現と非言語表現及びその際の社会的背景を探索するための刺激文である（刺激文②の参照）。本研究では、正確な伝達を期すために、刺激文を日本語と被験者の母語（シンハラ語）の両言語で提示した。筆者（調査者）と被験者はともに、スリランカ出身でシンハラ語母語話者だったため、調査に関する説明や指示を含め、被験者と筆者の間の全ての会話をシンハラ語で行った。

<調査期間>

調査は、2019年5月に、大学の研究室で実施された。

刺激文①日本語版（日本人の感謝行動）

感謝に値する場面で、言語または非言語を使って様々な形で感謝を示すと思われていますが、あなたは、感謝に値する場面で、日本人がコミュニケーションをするとき、同性同士、異性とのコミュニケーションで、また年齢や地位が同じまたは異なる（目上、目下の）相手とのコミュニケーションで、どのようなことが特徴としてイメージされますか。日本人のコミュニケーションでの性や地位の影響の特徴として思い浮かぶのはどのようなことでしょうか？頭に浮かんできたイメージや言葉を、思い浮かんだ順に番号をつけてカードに記入してください。

刺激文②日本語版（スリランカ人の感謝行動）

感謝に値する場面で、言語または非言語を使って様々な形で感謝を示す
と思われませんが、あなたは、感謝に値する場面で、母国（出身国）の人が
コミュニケーションをするとき、同性同士、異性とのコミュニケーション
で、また年齢や地位が同じまたは異なる（目上、目下の）相手とのコミュ
ニケーションで、どのようなことが特徴としてイメージされますか。母国
（出身国）の人のコミュニケーションでの性や地位の影響の特徴とし
て思い浮かぶのはどのようなことでしょうか？頭に浮かんできたイメ
ージや言葉を、思い浮かんだ順に番号をつけてカードに記入してください。

具体的な調査では、被験者にまず、日本語とシンハラ語の刺激文①を提示するとともに、シンハラ語の文章をゆっくりと丁寧に読んだ後、頭に浮かんできた言葉を1枚のカードに1文ずつ記入させた。次に、それらのカードを重要度順に並べ替え、番号を付けてもらい、項目間の類似度を7段階（1. 非常に近い、2. かなり近い、3. いくぶんか近い、4. どちらともいえない、5. いくぶんか遠い、6. かなり遠い、7. 非常に遠い）で評定させた。ついで、統計ソフト HALWIN を用いて、ウォード法の類似度距離行列によるクラスター分析を行った。これらの各クラスターを被験者に提示し、被験者のイメージを聴取した。この聴取もシンハラ語で行い、IC レコーダーに録音したデータを文字化し、その後、筆者が日本語に訳した。

ついで、シンハラ語話者の感謝行動を探索する刺激文②を用いて、上記の日本人の感謝行動と同様の手続きで PAC 分析を行った。引き続き、クラスターの構造分析及び被験者からの聴取データを基に総合解釈を行い、日本語母語話者とシンハラ語母語話者の感謝の言語・非言語行動及びその際の文化スキーマを比較検討した。

4. 結果と考察

本節では、統計ソフト HALWIN のウォード法によるデンドログラムをもとに、日本語母語話者及びシンハラ語母語話者の順に、それぞれの話者に見られる感謝の言語表現と非言語表現の連想反応と、クラスターについてのイメージを記述し、次に、そ

れらについての解釈を行う。最後に、文化スキーマの観点から両母語話者の特徴を比較する。

4.1 日本語母語話者の感謝の言語・非言語行動についてのイメージ

感謝を表す場面で見られる日本語母語話者の言語行動及び非言語行動についての被験者のデンドログラムは、図1のようになった。

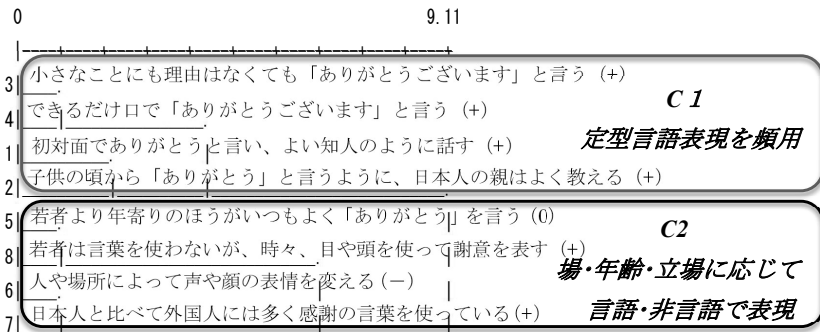


図1 日本人の感謝表現についてのデンドログラム

<被験者のイメージ>

クラスター1は、「小さなことにも理由はなくても『ありがとうございます』と言う」「できるだけ口で『ありがとうございます』と言う」「初対面でありがとうと言い、よい知人のように話す」「子供の頃から『ありがとう』と言うように、日本人の親はよく教える」までの4項目。

日本人は、自分をよく見せたい。自分をきれいに見せるための「ありがとう」だ。これが頻繁に「ありがとう」と言う一番の理由だと、僕は考える。一方で、その慣れで、そのまま使ってしまう、あまり考えていない。自然に出てきちゃう言葉。また、「ありがとう」と言ったら、相手は何らかの怒りを持っていたら、それを和らいでもらえる。そのために使っている。例えば、二人がぶつかって、片方が転げ落ちた物を拾ってくれた時に、いい笑顔で「ありがとう」と言う。これは、ぶつかったことによって相手が怒りなどを持っていたら、その心を和らいでくれる。隣の車線からこちらの車線に車を入れたときに、「入れてくれてありがとう」とハザードライトを点灯して謝意を表す。ここでも勝手に車を車線に入れたことによって、相手は何らかの怒りを感じ

じていたら、それを和らげるような効果があると思う。相手の嫌な気持ちを軽くする。誰かの前で、子供に『ありがとう』と言って」と親が指示するのは、子供を良くしたいというよりも、親が大人として自分をよく見せたい気持ちが多くあるからだと感じる。皆がそうじゃないと思うんだけど、親の目を見ると誰がそうか、そうでないか、僕にはよくわかる。親の良さを、子供を通して見せたいんだと。

クラスター 2 は「若者より年寄りのほうがいつもよく『ありがとう』を言う」「若者は言葉を使わないが、時々、目や頭を使って謝意を表す」「人や場所によって声や顔の表情を変える」「日本人と比べて外国人には多く感謝の言葉を使っている」までの 4 項目。

若い人は、言葉で感謝を言わなくてもいいと思う。年寄りは、長い人生の多くの時間が終わっていて、後半であり、人生のことも色々わかっている。だけど、若者は、まだ若いから年配ほどの感謝の気持ちはないし、まだわかっていない部分も多くて、口頭で感謝を言わなくてもいいと思っている。このようなパターンがあると思う。小さい頃は感謝を言う、若い頃はあまり言わない、ちょっと反抗的なこともあるから。年配になるとまた人生のことがよくわかってきて感謝を言う、というサイクル。だから若者は、感謝を言わないといけな感じるときは、ちょっとだけ軽く小さく言う。場・人によって違うとは、少し狡いと思うが、自分にとって大事な人、関係を保つべき人に口頭で感謝を言う。少し狡いと考えられる。また、これも自分をよく見せるための「ありがとう」。もちろん、ちゃんと笑顔で「ありがとう」と言う人もいる。コンビニで日本人店員さんに挨拶をしない、お金を投げて行く人が、僕には丁寧に「ありがとう」と言う。つまり、自分の文化が上、他人を尊敬しているよ、と見せるためにしている。オーバーリアクションだな。

<被験者によるクラスター 1 と 2 の比較>

自分達を良く見せたいと考える点で、クラスター 1 と 2 は非常に似ている。また、場、人の立場などによって、感謝の表現が変わるという点でもこの 2 つのクラスターは似ている。

年齢によって、感謝を言葉で言うか否か、またその言い方が異なるというのは、これらのクラスター間に見られる違いだ。やはり、日本では、場、人との関係、身分、そして立場などによって感謝の表し方が変わる。例えば、先生に「ありがとうございます」と言って、後輩にも同じ言葉を言っても問題ないが、その逆の形はおかしい。

4.2 日本語母語話者の言語・非言語行動及び文化スキーマについての解釈

「子供の頃から『ありがとう』と言うように、日本人の親はよく教える」ことから、感謝の言語表現は「慣れで、そのまま使ってしまう、あまり考えていない。自然に出てきちゃう言葉」である。日本語母語話者の感謝を示す言語表現には、決まり文句の「ありがとう」「ありがとうございます」があり、頻繁に使用する。その中でも「若者より年寄りのほうがいつもよく『ありがとう』を言う」との被験者の観察のように、年寄りのほうが感謝を口頭で表すことが多い。また、「人や場所によって声や顔の表情を変えて柔らかい口調に声を変える」、会釈顔を見せる、頭を下げる、軽く拳手するなどの非言語表現も同時に使用し、「若者は言葉を使わないが、時々、目や頭を使って謝意を表す」。ただし「若者でも、感謝を言わないといけなと感じたときは、ちよつとだけ軽く小さく言い、自分にとって大事な人、関係を保つべき人には口頭で感謝を言う」。

さらに、日本語母語話者は頻繁に口頭で感謝を表すが、その全てが謝意を示す感謝とは言い切れないであろう。つまり、被験者が報告しているように、相手と良い関係を保ち、自分を良く見せるためや相手の気持ちを和らげるという機能も、感謝表現に含まれていると考えられる。また、「日本では、場、人との関係、身分、そして立場などによって感謝の表し方が変わる。例えば、先生に「ありがとうございます」と言って、後輩にも同じ言葉を言っても問題ないが、その逆の形はおかしい」。場、人間関係、身分、年齢などによって「感謝の表し方の定型表現」が異なることも、日本語の特徴だと言えよう。他方で、「外国人には多く感謝の言葉を使って」おり、「日本人店員さんに挨拶をしない、お金を投げて行く人が、(スリランカ人の) 僕には丁寧に『ありがとう』と言う」。

これらのことから、いずれも日本での感謝の規範行動であるが、クラスター1を「定型言語表現を頻用」と、クラスター2を「場・年齢・立場に応じて言語・非言語で表現」と命名できよう。クラスター2における項目に対して被験者が(+) (-) (0) という全てのイメージを持っていることから、葛藤を感じたり、ときには冷めた状態に陥ったり肯定的に考えたりするなど、被験者が日本語の感謝表現についてまだ混乱状態にいとえよう。しかしながら、クラスター1における全ての項目に対して肯定的なイメージを持っていることから、日本語の感謝表現に対して違和感を感じているものの、それらを受け入れる適応過程に移っていると考えられる。

4.3 シンハラ語母語話者の感謝の言語・非言語行動についてのイメージ

感謝を表す場面で見られるシンハラ語母語話者の言語行動及び非言語行動についての被験者のデンドログラムは図2のようになった。

<被験者のイメージ>

クラスター 1 は、「口で『ありがとう』と言わなくても互いに手伝ってあげたりもらったりする」「仲がとてもいい友達だったら『ありがとう』と言わない」「相手が自分より下の人だったら、『ありがとう』と言わない」「家族の人に『ありがとう』と全然言わない」「スリランカ人はあまり言葉で感謝を言わない」までの 5 項目。

親友とは、感謝の言葉よりも言葉を越えた強い関係・つながりがある。何かをしてもらったら、かえって何かをしてあげなきゃという気持ちは心の中に強くある。それが非常に大事。親友に助けてもらって、言葉で‘Thank you’と言ったら、おかしくて変。普通ではない。親しい人に対して、感謝を言葉で言うと、その人との関係が遠く感じる。関係が遠くなる。親友じゃなくなる。一方で、遠い関係にいる人に対しては、親しくしてもらうために感謝の言葉を使う。文化的な考え方と慣れだと思うが、自分より下の人、つまり僕の場合は、後輩、年下の人にも感謝を言葉で言わない。だけど、スリランカでは、自分より下というと、他に、身分の低さ、下位カスト、金持ちかどうかなどの色々な意味がある。僕は、そういうのを気にしないけど、年齢的に下、そして後輩のことだけ考えていて、そのような人に対して感謝を言葉で言わない、慣れないから。

スリランカでも、ある場面で人に見えるように、見せるため、感謝を言う。自分をよく見せるための社交辞令的な感謝。しかし、それよりも強く心に感じるのは、何かをしているときに、目や拳手などで表す感謝。だけど、日本ではこれは違う。その逆。言葉で言わなければならない。(スリランカでは、) 言葉で言うよりも手や目で感謝を見せるほうが心に感じるだけではなく、強く伝わる。

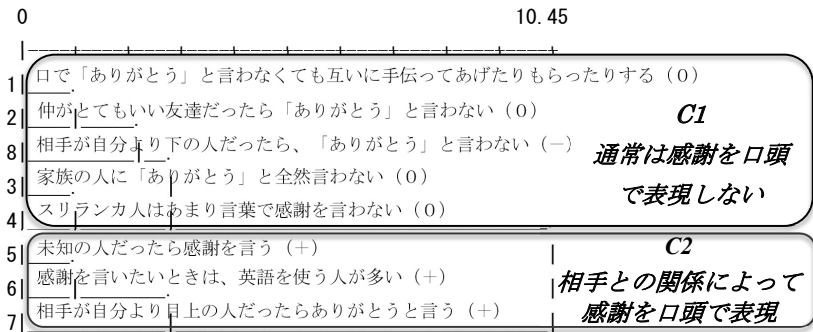


図 2 スリランカ人の感謝表現についてのデンドログラム

家族に言葉で感謝を言うと、変、普通じゃない。家族は、言っても言わなくても仲が悪くならない。怒ることもない。変わることもない。感謝を言ってくれるまで待つということもない。期待していないこと、こちらもわかっている。つまり、言っても言わなくても変わりはない。また、言うという慣れもない。もし、言うときも冗談っぽく、揶揄するような感じで言う。ここで家族とは、兄弟、親、全てだね。親戚には、色々な選択があつて、親戚よりも近くていい友達がいる場合もある。そのとき、友達には言わないが、関係が遠い親戚には言う。言ってしまう。それは、関係によって違う。兄弟同士でもそうなると思う、関係が遠いなら。スリランカではその状態は見られないほどだが、日本ではよく見られる。日本では、家族から離れて一人暮らしをするなどのことが多いからではないかと思う。

クラスター2は、「未知の人だったら感謝を言う」「感謝を言いたいときは、英語を使う人が多い」「相手が自分より目上の人だったらありがとうと言う」の3項目。

関係を作りたい、つながりを始めたい時なら、感謝を言う。親しくしてもらいたいなら、感謝を言う。つまり、これから関係を作る人の場合。英語を使うとは、母語で「あなたは助けてくれた。Sthuthi⁽²⁾」と言うと、ちょっとおかしく感じる。変に感じる。‘Thank you’と言うと、普通に終えられる。シンハラ語は、重すぎるだけではなく、頭がおかしい人かと思わせるほど。英語は軽くて、すぐその言葉で終わる。

スピーチをする場では、言っても大丈夫だけど、普通に二人で話していて、‘Bohoma Sthuthi’⁽³⁾と言うと、それはちょっと〜。やはり、感謝を言うか言わないかが場によって違うかな。知らない人にとって、‘Sthuthi’と言うのは、これから関係を作っていくため。これもまた狡さ。相手は、自分より上の人の場合、感謝を言葉で言うのは、自分の面子を保ったり上げたりするため。同じ感謝の言葉なのに、人によって言うか言わないかにするとは、それは狡さ以外に他はない。自分を良く見せるために言う感謝の言葉。また、言うか言わないかが場、自分の気持ち、時間、相手によって異なる。本当に尊敬を示したい時も使うが。もう体にしみ込んでいるので、考えてやるよりも自然にやってしまう。

<被験者によるクラスター1と2の比較>

いつも会う、一緒に行動するような人には言葉で感謝を言わないが、始めて会う、たまに会う、あまり関係のない人には感謝を言葉で言う。また、自分より下レベルの人に言わないが、上レベルの人に言う。自分にとって必要性がある人に言うが、必要性のない人に言わない。ここでは、狡さと尊敬も関わっている。これらの点でC1と

C2 が似ていると考える。

スリランカの文化システム・流れ、そして習慣がどのように出来上がっているかを示している。友だちにウインクして感謝を示すなどの感謝の方法は、誰かに教えてもらったことではない。自然に学んできてできていること。もちろん、小さい頃は、‘Thank you’ と言いなさい、と教えてもらっているんだけど、どこで、誰に対して（上、下）、どうやって（英語かシンハラ語か）まで具体的に教えてもらっているわけではない。この点でこの2つのクラスターが違う。

また、C1 は自分に親しくて近い人達、何があっても一緒にいる人達、何でも言える人達、何でも頼める人達。C2 では、外・よその人達。この違いもある。つまり、この距離感（親しさ）によって「ありがとう」と言うか否か、どう言うか、表現の種類などが決まる。親友には英語でも言わない。言ってしまった時も、とても軽く冗談ぽく。しかし、日本では、親しい時もお礼を言うと思う。ところが、スリランカの場合、お礼を言うと、関係が遠く感じる。

日本と違って、スリランカでは、言わなくても問題はない。親しい中では、互いに知っている。いつか反対に同じようなことをしてあげられる時がある。それが感謝なので、その時に考えればよい。あるいは、ほとんど考えてもいないうちに、助けてあげている。お互い様だから（お礼を）待つことは全くなく、問題もない。日本は、これの逆だと思う。言葉を交わされる関係は強くて固いが、言葉をあまり交わされない関係は固いものではないと思う。

4.4 シンハラ語母語話者の言語・非言語行動及び文化スキーマについての解釈

シンハラ語母語話者に見られる感謝の言語表現として ‘Thank you’、‘Sthuthi’、‘Bohoma Sthuthi’ などがある。また、非言語表現として、細目で優しく見る、軽く挙手するなどがある。

シンハラ語母語話者は、「口で『ありがとう』と言わなくても互いに手伝ってあげたりもらったりする」し、「仲がとてもしい友達」「家族」などの身近で親しい関係、「自分より下の人」においては、感謝を口頭で表さないが、その代わりに、互いに手伝い合うことによって感謝を示している。「(スリランカでは、)言葉で言うよりも手や目で感謝を見せるほうが心に感じるだけではなく、強く伝わる」。「互いに感謝の言葉を期待することもなく、感謝の言語表現がなかったからといって関係を壊すこともない。言っても言わなくても変わりはない。また、言うという慣れもない」と被験者は感じている。「親しい人に対して、感謝を言葉で言うと、その人との関係が遠く感じ

る。関係が遠くなる。親友じゃなくなる」。また、自分より目下の中には「身分の低さ、下位カスト、金持ちかどうかなどの色々な意味がある」。しかし、「未知の人」「目上の人」「これから関係を築きたい人」には感謝の言葉を使う。言葉で感謝を言うか言わないかが場、自分の気持ち、時間、相手によって異なる。

さらに被験者は、自分を良く見せるための社交辞令的なものと、本当の意味で礼と尊敬を示す二種類の感謝表現があることも語っている。また、「シンハラ語は、重すぎるだけではなく、頭がおかしい人かと思わせるほど。英語は軽くて、すぐその言葉で終わる。」との被験者の報告にあるように、言語による感謝表現は、英語の‘Thank you’がほうが多く使用される。

これらのことから、クラスター1を「通常は感謝を口頭で表現しない」、クラスター2は「相手との関係によって感謝を口頭で表現」と命名できよう。また、クラスター1における多くの項目について肯定の感情も否定の感情も生じない(0)のイメージを報告しているところから、被験者がシンハラ語の感謝表現を対象化し、距離を置いて感じるように変化していると言えよう。クラスター2の全ての項目をプラスに考えていることから、スリランカ人はあまり口頭で感謝を表さないと指摘がある(Disanayaka 2007)にもかかわらず、被験者は距離のある人に感謝を口頭で表すことについて、肯定的に捉えていると推測される。

4.5 結論：日本語及びシンハラ語母語話者の言語・非言語表現と文化スキーマの比較と異文化コミュニケーション

どちらの母語話者にも感謝の言語表現が見られ、これらの言語表現が使用されるか、どのように使用されるかが、場、状況、相手との関係、相手の身分、年齢などの要因によって異なる。これは、両話者の文化に見られる共通の特徴だと言える。言語による感謝表現には、謝意の応答だけでなく、人間関係を促進するための機能があると考えられる。本調査の結果からは、感謝の言語表現には、お礼の応答だけでなく、相手に自分を良く見せ、自分の面子を保つという社交辞令的な機能があり、これは、両母語話者に見られる共通点であると言える。

違いについては、シンハラ語母語話者は、親しい関係においては、互いの関係に距離を感じさせないために、言語表現よりも非言語表現による感謝を多く使用する。一方でそれほど親しくない人間関係においては、上述した方法と真逆で、自分の面子やこれからの関係構築について考え、言語表現による感謝が多い。つまり、シンハラ語母語話者が相手との親密さの関係によって、疎遠が言語で、親密な関係では非言語に

よる感謝表現が多く、言語と非言語表現を交代していると言える。他方、日本語母語話者は、非言語表現のみで感謝を表すことが少なく、どの場や関係においても言語と非言語による両方の表現を使用しているようである。また、場、相手に合わせて、言語表現の丁寧度を変更する。例えば、決まり切った定型表現の「ありがとう」を「ありがとうございました」にし、丁寧度を変えることである。

シンハラ語母語話者の場合、親密だと感謝を言語表現しないとされているが、それは決まり切った定型型についてで、場や相手によって「娘が喜んでいました」などの間接的で遠回りの言語表現は使われることがある。他方、親しい場合には言語よりも、非言語での感謝表現の方が強いと感じられている。

「通常は感謝を口頭で表現しない」、「相手との関係によって感謝を口頭で表現」というシンハラ語母語話者のクラスターと、「定型言語表現を頻用」「場・年齢・立場に応じて言語・非言語で表現」という日本語母語話者のクラスターの命名にも両話者の違いが明確に表れている。

日本語話者とシンハラ語母語話者が感謝表現するときの、異文化コミュニケーションの留意事項としては、日本語話者はシンハラ語話者と親しくなると、定型的な言語表現は親しさを減少させやすいこと、手や目の使い方などの非言語が重要な役割を果たすこと、非定型の間接的表現（例えば、「娘が喜んでいました」など）は利用されていることを知ることが望まれる。他方のシンハラ語話者にとっては、日本語話者の間では、定型的な感謝表現が頻繁に用いられること、きちんとお礼の行為を返すことを否定するものではないこと、親しくてもそうでなくても必要な文化行動であること、目上か目下かによって言語表現の定型が異なること、定型のどれを使うかを間違えると欠礼となることを知る必要がある。それとともに、本研究の被験者は、日本の謝意表現のスキーマに抵抗感が減少し、適応していく過程を示すものであった。そのため、文化スキーマの違いの情報を共有できるように、両言語話者に伝達、教育することが望まれる。

5. おわりに

本調査では、PAC 分析を用いて、日本語母語話者とシンハラ語母語話者の感謝を表す言語・非言語表現とその際の文化スキーマについて明らかにした。しかし、調査では、大学に通学する 1 名のシンハラ語母語話者しか被験者としておらず、さらに日本語母語話者の感謝表現 8 項目、シンハラ語母語話者の感謝表現 8 項目というわずかな連想項目しか得ていない。従って、本研究での結論は全てのシンハラ語及び日

本語母語話者に共通するとは言い難いが、操作的・客観的なデータを収集し、臨場的な被験者の語りを理解していくことを通じて、いくつもの発見的知見が得られている。日本語母語話者とシンハラ語母語話者の感謝表現での異文化コミュニケーションに有効な考察もできた。今後は、さらに被験者を増やし、他の母語話者の調査に拡張していきたい。また、異文化教育や日本語教育の観点から、文化も含めて日本語の感謝表現の教育方法と教育内容をさらに検討していきたい。

謝辞

本論文は、2019年度英国日本語教育年次大会で行ったポスター発表の一部に加筆修正をしたものです。発表の際に、貴重なご意見をくださった方々に感謝をいたします。

注

- (1) スリランカは多民族国家で、そのうちシンハラ語はスリランカ人の74.9%に話される言語である。シンハラ語を母語とする民族はスリランカのシンハラ民族以外にはいない。
- (2) 感謝を直接的に表すために、シンハラ語に見られる決まり文句型の言語表現で、日本語の「ありがとうございます」の意味に当たる。
- (3) 感謝を直接的に表すシンハラ語の決まり文句型の言語表現である。‘Bohoma’ (ボホマ) は、日本語ではたくさんという意味である。そのため、‘Bohoma Sthuthi’ とは、日本語の「どうもありがとうございます」に当たる意味である。

参考文献

- (1) スィリラット・サンタヨーパス (2011) 「感謝の場面での謝罪の発話—日本語母語話者とタイ語母語話者の意識と使い分け—」『一橋大学国際教育センター紀要』第2号, pp.37-55.
- (2) 周乗風 (2018) 「ビジネス会話における感謝表現の対照研究—日中経済小説を中心に—」『国学院大学大学院紀要：文学研究科』49号, pp.81-110.
- (3) 内藤哲雄 (2012) 『PAC 分析実施法入門[改訂版]「個」を科学する新技法への招待』ナカニシヤ出版
- (4) 中村香代子 (2006) 「感謝ストラテジーの日独対照研究およびドイツ人日本語学習者のストラテジー選択」『言語情報科学』第4号, 東京大学大学院総合文化研

- 究科, pp.243-257.
- (5) 秦秀美 (2002) 「日・韓における感謝の言語表現ストラテジーの一考察」『日本語教育』第 114 号, pp.70-79.
 - (6) 三宅和子 (1993) 「感謝の意味で使われる詫び表現の選択メカニズム—Coulmas(1981)の indebtedness 『借り』の概念からの社会言語学的展開—」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』第 8 号, pp.19-38.
 - (7) 三宅和子 (1994) 「日英対照研究—文化・社会を反映する言語行動—」『日本語学』第 13 巻第 8 号, 明治書院, pp.10-18.
 - (8) 横山紀子 (2008) 『非母語話者日本語教師再教育における聴解指導に関する実証的研究』ひつじ書房
 - (9) ランブクピティヤ, S.M.D.T. (2013) 「日本語母語話者とシンハラ語母語話者の感謝場面についての理解の傾向—感謝の送り手と受け手の観点から—」『言語文化学会論集 20 周年特別記念』41 号, 言語文化学会, pp.35-73.
 - (10) ランブクピティヤ, S.M.D.T. (2014a) 「日本語母語話者とスリランカ人シンハラ語母語話者の感謝表現ストラテジーの傾向」『比較文化研究』111 号, 日本比較文化学会, pp.195-208.
 - (11) ランブクピティヤ, S.M.D.T. (2014b) 「日本語母語話者とスリランカ人シンハラ語母語話者の感謝場面における『場』の要素についての理解と感謝表現」『言語文化学会論集』42 号, 言語文化学会, pp.95-116.
 - (12) ランブクピティヤ, S.M.D.T. (2014c) 「日本語母語話者とシンハラ語母語話者の感謝場面における『人間関係』についての理解と感謝表現—ロールプレイを中心に—」『日本語教育』158 号, 日本語教育学会, pp.112-129.
 - (13) ランブクピティヤ, S.M.D.T. (2017) 「日本語母語話者とスリランカ人シンハラ語母語話者の感謝場面における『当然性』についての理解及び感謝表現ストラテジー」『言語文化学会論集』49 号, 言語文化学会, pp.105-123.
 - (14) Disanayaka, J.B. (2007). Say it in Sinhala. Stamford Lake, Sri Lanka